日ロ交流

発行　：特定非営利活動法人　日ロ交流協会
E-mail:nichiro@nichiro.org
Home Page http://www.nichiro.org
〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14 麻布台マンション401号
Tel：03（5563）0626　Fax：03（5563）0752

ロシア語現地学習会 - 点をつなぐ

藤本 信義

ロシア語検定の受験について検索していた時に「夏季現地ロシア語学習会」の募集に出会った。30年勤続休暇を何に使うか考えていたところで期間もぴったり合う。家内の後押しもあり参加を決めた。

ところでどこの書店に行ってもロシア語の語学書は多くはない。昔はさらに少なかった。少ない中で手元にある一番古い本がNHKロシア語入門と博友社ロシア語辞典ー共に昭和56年発行版ーだ。大学入学の年でソ連はまだ鉄のカーテンの向こう側だったが、宇宙工学の資料を原語で読みたいと思ったか、偶然興味を引かれたのか動機はよく覚えていないが、第二外国語でもない語学なのに入門書、カセット、辞書と3点セットを揃えて意気込みだけはあったはずだが、独学では難しかったのか第4課ぐらいで早々と挫折したのが書きこみに残っていた。

そのソ連がロシアとなり、宇宙開発は競争から協力の時代になって国際宇宙ステーションが生まれた。初めてのロシア出張では「スタンダード40」で基本表現だけ覚えた。もっとも何とか通じたのは、これいくらですか、高いです、まけてください、ありがとうぐらいだ。

宇宙での協力が増え、モスクワやカザフに何度も出張し、自分の本棚にはロシア語やロシア事情に関する本が大分増えたが語学はさっぱり上達しない。会話力向上にはアウトプットの機会が必要だと感じていたところに出会ったのがこの学習会のお知らせだ。新たに宇宙基地が建設されている極東での開催に期待を膨らませ出発の朝を迎えた。

成田からわずか2時間のフライトで到着したハバロフスクは思いの外暑かった。大学の寮が立ち並ぶ風景は筑波大学の学生宿舎のあたりと変わらない雰囲気だ。この寮で20代から70代までの7名の参加者と一緒に過ごした。若い参加者からは時代に適応した知識や行動力、年長の方からは経験に基づく深い見識を習い楽しい時間だった。

午前中は授業でみっちりしぼられ午後はエクスカーションという繰り返しの中、日本の喧騒な情報から隔絶された時間は快適で貴重な経験だった。

授業は2コマ×5日で10コマ、リスニング＆スピーキングの授業に加え、スライドを使ってハバロフスクや極東の事物について学ぶ授業、音楽を使ってロシア語のリズムと発音を学ぶ授業の3種類が用意されていた。背伸びして中級クラスに入ったが実力者ばかりの中で四苦八苦、あきらめずに続けられたのは、熱心に指導してくれた先生方のおかげだ。音楽クラスでは最後の回で各自好きな歌をやることになり私はステンカラージンを選んだ。長い歌詞にもかかわらず歌詞カードも用意していただき、歌を楽しんだ。聞き取り、発話、発音、すべて自分の実力では厳しく十分にできなかったが、その分多くの課題を発見できた。

午後のイベントの中で特に印象的だったのは、総領事館訪問、現地の日本語学習者との交流、バルティカビール工場見学の3つだ。総領事館では同市の在留邦人がわずか五十名ほどで日本との年間の行き来がそれぞれ五千人程度という少なさにおどろいた。日本語学習者との交流では、お互いに初心者の抱える「なかなか日本/ロシア語が話せない！」という共通の苦しさを感じる一方、SNS、動画、翻訳などでスマホが強力なツールであることも再確認した。

バルティカビールは20年前の初めての出張の折「ビールを番号で区別するとはソビエト的！」と勘違いをしていたのだが、実は誕生して20数年の新しいブランドと知って驚き、試飲会でそれぞれの味の違いを楽しんだ。

あっという間に特別な時間は終わってしまったが、38年前の夏の日に大学書籍部で1冊のロシア語テキストに出会わなければここに来ることはなかっただろう。ロシアとの縁がこれからどこに繋がって行くのか、引き続きその景観を楽しんでいきたい。開催にご尽力いただいた交流協会の皆様、そして楽しい一週間を共に過ごさせていただいた参加者の皆様に心からの感謝を申し上げたい。

●第56回マトリョーシカ絵付け教室
日時：2018年10月28日（日）13：00～16：00
講師：菅野エレーナ
場所：田町駅みなとパーク芝浦、「リーブラ」造形表現室
会費：3,000円（5個セットの教材、講師代、お茶代含む）

●マトリョーシカ作品展示会
作品展示の他に実演、販売、体験あり。
日時：2018年11月5日（月）～7日（水）
場所：神保町「書泉グランデ」7階

●第31回麻布区民センターふれあいまつりに参加
日時：10月20日（土）12：00～ロシア民謡を楽しむ会
　　10月21日（日）11：20～ロシアンカ

●第8回テーマ別ロシア語「ＡＶ教室編」
日時：10月21日(日)13：00～16：00
場所：田町「リーブラ」2階学習室Ａ
費用：会員3,000円、一般4,000円
講師：オクサーナ・ピスクノーワ

●会員限定日ロ交流バスツアー
日時：11月4日（日）～5日（月）
場所：松本城、諏訪湖周辺
費用：22,000円、小学生9,000円、未就学児3歳まで7,000円
定員になり次第締め切りいたします。

＊お問い合わせ、お申し込みは協会事務局まで
Tel：03-5563-0626　nichiro@nichiro.org

● 広報部宛、ご投稿、ご意見をお待ちしております

「ロシアクラシックバレエの魅力を知る」講演を聞いて

江本 大輝

8月18日の盛夏、ロシアバレエ界で活躍する岩田守弘氏の講演会が日本記者クラブで開催されました。私は主催する協会の担当として参加し、素晴らしい講演に感動した一人です。

岩田氏と言えば世界に冠たるロシア・ボリショイ劇場で外国人初のファーストソリストとして活躍した世界的な名手、今はシベリアの有力な国立劇場で若き芸術監督として活躍中の方ですが、お盆の帰国の合間をぬっての今回の講演会は非常に貴重な機会となったことは言うまでもありません。早めに会場入りされた岩田さんは受付担当の裏方の我々とも気さくに握手し挨拶して下さるなど、飾り気のない人柄に、講演でも言及されたロシアバレエの魅力をそのまま体現しているように感じたのは私だけでは無かったと思います。

ユーモアも交えて分かりやすくロシアバレエの魅力を語って頂き、私のようなバレエの門外漢にとっても楽しく大変心に残る内容でした。岩田さんの人生経験やメッセージに私も勇気づけられましたが、今回多く参加していたバレエを志す若者にとっては貴重な励ましだったと思います。

お話では、世界のクラシック・バレエにおけるロシアバレエの特徴は「ダイナミック」さであり、バレエ大国を築いたロシアのダンサーや振付師、先生方の人と魅力、またロシアの劇場の総合芸術としての重層的なシステムに言及。「観客」という要素の重要性も指摘されました。実は私は13年ほど前にモスクワのボリショイ劇場で「白鳥の湖」を観たのですが、ダンサーと観客が一体となった劇場の光景は素人の私にとっても衝撃的でした。

繰り返し岩田さんが強調されたのは、バレエとは「ロマン」であり踊りは「テクニック以上に心が大切」ということでした。「バレエとは道徳」とも。でも最近のバレエ界ではテクニック重視やアスリート化の風潮も強いそうです。岩田さん自身は卓抜なテクニシャンながら、なお「心」の大切さを強調される事に感銘を受けました。

「成功」とは人に評価されることでもあり、世間の栄誉、名声もいずれ人々は忘れてしまう、一方で自分の「好き」や「こだわり」を追求することで得られる充実感を大切にしている、とのお話も。

ところで講演後の質疑応答で紹介されたエピソードはとても印象的でした。それは現在、岩田さんが芸術監督をしているシベリアのウラン・ウデの国立劇場は、実は終戦直後にシベリアに抑留された日本人が完成した建物だそうです。過酷な環境で老朽化した周囲の建物に比べて今も立派にその姿を残し、重要な劇場として活用されているというのです。当時辛酸をなめた日本人抑留者が作ったものが、いま岩田さんの活躍を助けているという事に不思議な縁を感じました。岩田さんは建設に携わった日本の人たちを顕彰する行事を行っているということです。そこからまた新たな日ロ友好の絆が生まれてくることでしょう。　(理事)

キャラバンの辿り着く先に

野口 久美子

北方領土における日ロの共同経済活動のひとつに、温室野菜栽培がある。この項目が入った事は、非常に嬉しい出来事だった。

数年前、日本のベンチャー企業で施設園芸のプロジェクトを担当していたことがある。当時、誰もロシア極東での温室、いわゆる野菜工場プロジェクトに関心など示さず、周囲の扱いはまさに「物好き」であった。しかし、ベンチャー企業にありがちな、一山あてたい感と向こう見ずなエネルギーは、ロシアの投資家と上手く調和し、我々はわりとたやすく契約を結ぶことに成功した。今思えば、それはロシア事情への偏見のない、ただ情熱の為せる技だった。

契約を記念した際の夕食会は、マイペースで辣腕の投資家を筆頭にしたロシア側と、若く物おじしない日本側が揃い、華やいだ空気に満ちていた。この温室プロジェクトが実施された極東の町は、私が若い頃、ロシア国営ラジオ局日本課で勤務したことのある町で、15年後にこのようなプロジェクトが立ち現れるとは、思いもよらなかった。

還暦過ぎたこの投資家は、ウォッカで満たされたグラスを掲げ、乾杯の挨拶をした。「私達はこれから新しい事業に共同で取り組む。『犬は吠えるがキャラバンは進む』という諺があるのをご存知でしょう。周囲は好き勝手に言うだろうが、我々は進むだけだ」投資家はグラスをあおった。日本人も、ロシア人も、この言葉に頷くよりほかなかった。

この諺は、まさに当時の我々の状況を如実に物語るものであった。称賛されるよりも事業の不確実さを批判されることのほうが、日本でもロシアでも多かった。

その状況下で、日ロ双方で関係が揺らぐことはなかった。大きな要因はプロジェクトをリードするロシア人社長が非常に優秀なエンジニアでもあったことと、ロシア語で円滑にコミュニケーションができていたことであった。本当に優秀な人間は、どこの国の出身であれ、力を発揮するものだ。

様々な犬が吠えることはあったが、我々のキャラバンは進んだ。かくて、契約締結から2年程して、野菜工場は完成した。一方、残念ながら日本側ベンチャー企業は民事再生の憂き目に遭ってしまった。

経験上確かであるのは、次の二点である。第一に、仮に北方領土で温室野菜工場が建設、稼働する場合、責任もって長く運営し続けられる組織が担当し、相応しい熱意と技量のある人材を配置することである。政治的流れで建設、稼働できるほど、生鮮食品ビジネスは容易くなく、投資する以上は、二国間で明確な成果を出さなければならない。第二に、事業の終息を常に考えておくことである。プロジェクトが始まる時、関係者は発展を夢見るが、実際、次々に多様な問題にぶつかる。いかなる成果が出た際、このプロジェクトは使命を果たしたと言えるのか明らかにしておくことで、より現実的なロードマップが出来上がるのではないだろうか。(理事)

南越谷における阿波踊り体験会参加

富澤　惣之介

日本ロシア学生会議の活動の一環として私は日ロ交流協会開催の南越谷における阿波踊り体験会に訪日中のロシア人学生とともに参加しました。ロシア人12名を含む、総勢30名の参加でした。子供から大人まで幅広い年代の方々が参加し、大盛況となりました。

南越谷阿波踊りは日本三大阿波踊りおよび、関東三大阿波踊りの一つとして数えられ、日本を代表する郷土文化の一つです。阿波踊りは約400年前の四国発祥ではありますが、南越谷では昭和60年に地域活性化や郷土意識の向上を目的として、地域の夏祭りとして取り入れられ時間をかけて市民によって大きく育てられてきた無形文化財です。今では約70万人の見物客が訪れる大規模な夏祭りになり、南越谷の夏の風物詩として知られています。

当日は8月下旬ではありましたが猛暑日。圧倒されるほどの人混みの中、どうにか全員南越谷駅に集合することができました。駅前の通りは屋台が立ち並び、祭りを楽しむ人達ですでに賑わっていました。踊り手が踊り歩く道の近くから私たちは席に座って流し踊りを見学することができました。半天、着物、笠などのユニークな衣装と、一糸乱れぬパレードはまさに圧巻でした。連ごとに異なる独特でリズミカルな踊りそして、力強い男踊りと艶やかな女踊りに、私たちは「阿波踊り」のエネルギーを感じました。

流し踊りを見物した後、私たちは“にわか連“という連の一員として参加出来、踊りに参加する前にプロの踊り手の方々から踊り方・振り付けに関する指導を受けました。流し踊りで見た、一見複雑そうな振り付けは、実際にリズムに合わせて踊ってみると、思いの外簡単でした。自分も含め多くの参加者も阿波踊りがはじめてであったのにも関わらず、活気に満ちたリズムに合わせて楽しそうに踊れていました。

阿波踊り終了後はロシア人の学生達と屋台を見物し、りんごあめや金魚すくい、くじ引きに挑戦するなど楽しい時間を過ごすことができました。阿波踊りを楽しんだ後、駅までの帰り道でロシア人が迷子になってしまうというハプニングがありました。また、日本の慣れない暑さにかなり苦労していたロシア人学生もいました。しかし、訪日が初めてだったロシア人学生にとって日本の夏祭りを日本人と一緒になって楽しめたことは思い出に残るものだったと思います。日本人参加者にとってもロシア人が阿波踊りを楽しむ姿を見ることができ、交流の大切さを再認識することができました。

ロシア人はアニメや漫画といったサブカルチャーだけでなく、日本に根付く郷土文化にも触れて楽しむことができたと思います。この機会を借りて日ロ交流協会そして、南越谷市のみなさまにお礼を申し上げたいと思います。

（日本ロシア学生会議代表）

スヴェトラーナ・デガイさん

島田　顕

モスクワで知り合ったスヴェトラーナ・ニコラエヴナ・デガイさんについて書きたい。彼女はロシア国籍の朝鮮人であり、ソ連における朝鮮人粛清犠牲者研究の第一人者である。彼女の父親はソ連軍人だったが、大粛清期に逮捕処刑された。父親の名誉回復、そしてその史料を得ることから彼女の活動は始まったといえよう。現在も、連邦保安局文書館など私たちがアクセスすることのできない文書館を含む様々な文書館で、朝鮮人粛清犠牲者の史料を丹念に調べ、それらを史料集（『ソ連内朝鮮人政治弾圧犠牲者　1934－1938』）の形で発表し続けている。史料集はすでに１５巻を数えている。また定期的に研究集会で成果を発表し続け、功労により在モスクワ韓国大使館より勲章を授与されている。

戦前にソ連に渡った日本人は、朝鮮名の偽名を名乗り、朝鮮人として活動していた。ソ連国内の朝鮮人社会を隠れ蓑にしていたのである。だから日本人の粛清犠牲者が朝鮮人犠牲者リストの中に何人か含まれている。また朝鮮人粛清犠牲者も、戦前日本の占領政策の一つである創氏改名政策により、日本名を持っている人物が何人かいる。例えば史料集第12巻掲載のサーカス関係者、パントシ・シマダである。また本紙265号に書いたキム・ギウン（戦前のモスクワ放送日本語課職員の一人）の父親キム・タイボンの史料が史料集第３巻にある。

・デガイさんと知り合ったきっかけは、2008年9月に彼女の史料集をモスクワのある図書館の売店で目にしたことだった。その売店にはすでに数巻しかなく、あるだけすべて購入したのだが、欠けている巻が欲しくて、出版社の「3月１日」（万歳事件の3月１日に由来している）の編集部に電話し、どうしても欲しいと話したところ、彼女の自宅の電話番号を教えてもらった。厚かましくも彼女に電話して、最寄りの地下鉄駅のホームで待ち合わせることにした。最初にあったときは不審がられたが、一所懸命こちらの事情を説明するとすぐに打ち解けることができた。

その後モスクワに調査に行くたびに連絡し、家にお邪魔し、交流を重ねるようになった。続巻をいただいたり、様々な情報も教えてくれた。例えば、カザフスタンの朝鮮人コミュニティーの近くに、日本人抑留者たちがいたことも。彼女はモスクワ市内の集合住宅の一室に一人で暮らしていて、息子さん（理工学系の研究者）は既に独立しているが、週末に郊外のダーチャ（別荘）で落ち合うのだそうだ。彼女は意外にも日本製の炊飯器を持っていて、ご飯を炊き、キムチ、鶏肉の煮物（サムゲタンっぽいやつ）など有り合わせのもので歓迎してくれる。いつもごちそうになるばかりなので、日本からのお土産と、ケーキと花を買って持って行くことにしている。

年齢を聞いたことはないが80歳にはなっているだろう。彼女にはいつまでも元気でいてほしい。そして今後もさらなる研究成果を発表し続けてほしいと思っている。

大使館の方々と板橋花火大会見学

中村 泰弘

都営三田線の電車の中は超満員。蓮根駅までたどり着いたのは花火開始の1時間前だったが、お手伝いの方は全員お揃いで、大使館の方々もあらかた荒川河畔の会場へ道案内した後だった。駅でしばらく待って、最後に到着したロシア人の家族を会場まで連れて行った。感じのよい4人家族で、奥様は笑顔を振りまいてとてもフレンドリーな方だ。3歳のお嬢さんウリアナちゃんを見て私の妻が「かわいい」と言うと、奥様が日本語でありがとうと言ってくれた。14歳の息子さんは長身で小顔の美男子で、背中に竜の絵が書かれた黒地の浴衣がよく似合っていて、会場に向かう通行人からも写真を撮られていた。

会場に着くと、協会のために用意された席はほぼ埋まっていた。だんだん空が薄暗くなってきて板橋区長らの挨拶の後、花火大会が幕を開けるとあちこちで歓声が起こった。板橋区花火大会は首都圏である約40か所の大会の1つで、荒川を挟んだ両岸から打ち上げられる。約100万人（主催者発表）の観客が集まり、合計12,000発のプログラムが19時から20時半まで続く。パンフレットによると今年の特色は、全国各地の10名の花火師達による単発花火の競演と、某ビールメーカーのCM付きの音楽花火だ。もちろん定番の大尺玉（重さ35kgの花火玉が400m上空まで打ち上がり直径360mの大きさに開花）や1千発以上連射のワイドスターマイン、幅700mのナイアガラの滝も見逃せない。

観覧席は会員の日向寺さんの所属する会が準備してくださり会の方々とも隣り合わせで観覧していたが、向こうは若い人達が多く花火が上がるたびに仲間同士でたあいもない冗談や掛け合いを楽しんでいた。こうやって美しい花火を肴にお喋りを楽しむのもまた日本の文化であり、対照的に静かに鑑賞しているロシア人にはそれがどう映っているのだろうか。ロシアの方々は何人かがいつの間にかごろりと仰向けになって花火の夜空を眺めていた。気付くと、あの案内した奥様も寝転がっていて、足が私にぶつかって苦笑いしながら謝った。ロシア人というのは戸外でも寝た姿勢が一番落ち着くのかなと私も苦笑した。

酷暑の折、飲み物はふんだんに用意されていたが、ロシア人家族の多くは自分のクーラーボックスなどに飲み物やスナックを入れて持って来ていた。それでも時々は飲み物を取りにこちらにロシア人が来たりして交流が生まれていた。

たっぷり1時間半、息つく暇もなく繰り出される光と音のショーを皆最後まで堪能した。花の火とはよくぞ言い得たもので様々な種類の花が色とりどりに咲くさまに、また蝶や魚といった動物や、スマイリーフェイス、ポケモンその他キャラクター、簡単な文字記号などが空に描かれるさまにロシアの観客たちもずっと見入っていた。あるいはスマホやビデオカメラを巧みに操作して鮮やかな光線を画面に収めていた。締めの花火が打ち上がって大会が終わったところで、ロシア人の方たちはお礼を言われて帰って行った。我々もしばらくして会場を後にし、毎年行っている駅近くの喫茶店に入り4人（千葉さん・望月さん・私の妻・私）で食事をしながら混雑が引くのを待った。

花火は日本だけのものではないが、モスクワで花火大会を観たことがあると言う日向寺さんによると、遊覧船に乗っている時に遭遇したその花火は15分位で終わってしまったそうだ。日本の花火大会は観覧時間が長い上、1つ1つの花火は手が込んでいて凝ったものが多い（花火玉を作るのに3～4週間、複雑なものは3～4か月かかるという）。製造で一番時間がかかるのは火薬の乾燥工程であるようだ。花火玉を形作る紙の殻の内側は「星」と呼ばれる火薬を泥の粒に塗り付けたものがぎっしりと詰まっているが、きれいな色や形を出すように火薬の粒を大きくするため、花火工場では冬季には乾燥室で、他の時期には天日干しで乾燥させてまた粒に付着させて、を繰り返す。作業員はこれらを手作業で行っている。

蓮根駅で帰りの電車に乗った所で23時を過ぎていたが、車内はまだごった返していた。閉会直後はもっと人ごみがひどかっただろうに、ロシアの皆さんは無事に帰宅できただろうかと思いながら帰路についた。　（常任理事）

モスクワ「ムゼイ」巡り・その12

ツァリーツィノ
Царицыно

大矢 温

モスクワ市内に18世紀の女帝、エカテリーナ二世が建造した離宮があることはあまり知られていないかもしれない。それも当然で、このツァリーツィノ離宮、建設の途中に女帝が亡くなったため建設は中断、そのまま放棄され、それ以後200年以上、廃墟として放置されていたからだ。それが2007年に大規模な改修を経て「国立歴史建築芸術景観公園博物館」として一般公開された。地下鉄の駅にも近く、交通の便も良い。モスクワで帝政時代の華麗な宮廷文化に接したいのなら、ここ、ツァリーツィノがお勧めだ。

広々とした公園の池や林の間を散策するのもよいが、何といってもここでのお薦めは小高い丘の上に立つ宮殿群。池のほとりから坂を上ると、そこには赤レンガ造りの美しい橋や白壁の聖堂、そして大宮殿と「パンの家Хлебный дом」などが点在し、一般に公開されている。中でも必見は大宮殿と「パンの家」。とはいえ、どちらの入り口も固く閉ざされている。中に入るためには大宮殿の横にある、地下鉄の入り口のようなガラス張りの近代的な建物からエスカレーターで地下に降りる。すると地下には軽食コーナーや売店、そして博物館への入り口など、驚くほど広い空間が広がっている。ここで入場券を買い、地下通路を抜けると「パンの家」、そして大宮殿へ入ることができる。「パンの家」とは、もともとは大宮殿で必要となる料理や日用品を準備する、台所的な施設として計画されたが、現在は美術ギャラリーとして利用されている。他方、大宮殿の地下は博物館になっており、この場所や離宮の歴史を知ることができる。建物自体では「エカテリーナのホール」が必見。金色に輝く列柱や豪華なシャンデリアに驚かされるだろう。また、最上階にある雰囲気のある落ち着いたビュッフェも穴場的な存在だ。そのほか、公園の中にもカフェやレストランが散在しているので、半日ぐらいかけてゆっくり散策するのもいいだろう。（札幌大学地域共創学群教授）

入場料は大人350ルーブリ、月曜休館日

最寄駅は地下鉄ツァリーツィノЦарицыноまたはオレーホヴォОреховоo（https://goo.gl/maps/UtJwZVnpdD52）